

#### 第四節:商品の呪物的性格とその秘密 (p96)

(4. Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis 原p85)

(1) 商品は、一見、自明で平凡な物に見える。商品进行分析してみると、それは形而上学的な小理屈や神学的な小言で一杯なものであることを示す。商品が使用価値である限りでは、その諸属性によって人間の欲求を満たすものだという観点から見ても、あるいはまた人間労働の生産物としてはじめてこれらの属性を得るものだという観点から見ても、商品には何ら神秘的なところはない。人間が自分の活動によって、自然素材の形を彼にとって有用なものに作り変えるということは、自明のことである。例えば、材木で机を作れば、材木の形は変えられる。それにもかかわらず、机はやはり材木であり、ありふれた感覚的なものである。ところが、机が商品として現れるやいなや、それは1つの感覚的であると同時に超感覚的なものに転化してしまうのである。

机は脚で床の上に立っているだけではなく、他のあらゆる商品との関係で、頭で立っており、そしてその木材の頭からは、机が自分勝手に踊り出すときよりも遙かに奇妙な幻想を繰り広げるのである。

(2) だから、商品の神秘的な性格は、商品の使用価値からは出てこない。それはまた価値規定の内容から生じるのでもない。なぜなら、第一に、いろいろな有用労働又は生産活動がどんなに違っていても、それらが人間有機体の諸機能だということ、また、このような機能は、その内容や形態がどうであろうと、どれも本質的には人間の頭脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出だということは、生理学上の心理だからである。第二に、価値量の規定の根底にあるもの、即ち、その支出の継続時間、または労働の量について言えば、この量は感覚的にも労働の質とは区別されるものである。如何なる社会状態であろうと、生活手段の生産に費やされる労働時間は、人間の関心事でなければならなかった。とはいえ、発展段階の相違によって一様ではないが。最後に、人間が何かの仕方で相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的な形態をもつことになるのである。

(3) それでは、労働の生産物が商品形態をとるとき、その謎的性格はどこから生ずるのか？明らかにこの形態そのものからである。いろいろな人間労働の同等性は、いろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がその中で実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。

(4) だから、商品形態の秘密はただ単に次のことの内にあるわけである。即ち、商品形態は、人間に対して人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、従ってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。

このような置き換え(Quidproquo)によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。・・・(p98)

商品形態やこの形態が現れるところの諸労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的な性質やそこから生ずる物的な関係とは絶対に何の関係もない。ここで人間にとって諸物の関係という幻影的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的な関係でしかないのである。それゆえ、その類例を見るためには、宗教世界という夢幻境に頼らなければならない。そこでは、人間頭脳の産物が、それ自身の生命を与えられて、それら自身の間でも人間との間でも関係を結ぶ独立した姿に見える。同様に、商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを、私は、労働の生産物に取りつく物神崇拜と

呼ぶ。商品として生産されるやいなや、これに付着するものであり、従って、商品生産から切り離すことができないものである。

(5) このような商品世界の呪物的性格は、前記の分析から分かるように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。

(6) およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからに他ならない。これらの私的諸労働の複合は社会的総労働を成している。生産者たちは、彼らの労働生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現れるものである。言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。

それゆえ、生産者たちにとって、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現れるのである。即ち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現れるのである。(p99)

(7) 労働生産物は、それらの交換の中で初めて、それらの感覚的に違った使用対象性から分離された、社会的に同等な価値対象性を受け取るのである。このような、有用物と価値物とへの労働生産物の分裂は、交換が既に十分な広がりと重要さをもつようになり、従って、有用な諸物が交換の為に生産され、従って、諸物の価値性格が既にそれらの生産そのものに際して考慮されるようになったときに、はじめて実際に実証されるのである。この瞬間から、生産者たちの私的諸労働は、実際に一つの二重な社会的性格を受け取る。それは、一面では、一定の有用労働として、一定の社会的欲求を満たさなければならず、そのようにして自分を総労働の諸環として、社会的分業の自然発生的体制の諸環として、実証しなければならない。他面では、私的諸労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲求を満足させるのは、ただ、特殊な有用な私的労働のそれぞれが、別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、従って、これと同等と認められる限りでのことである。互いに全く異なっている諸労働の同等性は、ただ、諸労働の現実の不等性の捨象にしかありえない。即ち、諸労働が人間の労働力の支出、抽象的人間労働としてもっている共通な性格への還元にはしかありえない。私的生産者たちの頭脳は、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易、生産物交換で現れる諸形態でのみ反映させ、一従って、彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格を、労働生産物が有用でなければならないという、しかも、他人の為に有用でなければならないという形態で反映させ、一異種の諸労働の同等性という社会的性格を、これらの物質的に違った諸物の、諸労働生産物の、共通な価値性格という形態で反映させるのである。

(8) だから、人間が彼らの労働生産物を、互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。

彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等値することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等値するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行うのである。それゆえ、価値の額には、価値とは何であるかが、書いてあるのではない。価値はむしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的な象形文字にするのである。後になって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探り出そうとする。

なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物だからである。労働生産物は、それが価値である限りでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしか

ないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものではあるが、しかしそれは決して労働の社会的性格の对象的外観を追い払うものではない。この特殊な生産形態、商品生産だけに当てはまること、即ち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格は、それらの労働の人間労働としての同等性にあるのであって、この社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが、商品生産の諸関係の中にとらわれている人々にとっては、かの発見の前にも後にも、最終的なものに見えるのであって、それは丁度、科学的によって空気がその諸要素に分解されてもなお、空気形態は1つの物理的な物体形態として存続しているようなものである。(p100)

(9) 生産物交換者たちがまず第一に関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。

この割合が、ある程度の慣習的固定性をもつまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本姓から生ずるかのように見える。たとえば、1トンの鉄と2オンスの金とが等価であることは、1ポンドの鉄と1ポンドの金とがそれらの物理的属性や化学的属性の相違にもかかわらず、同じ重さであるのと同じ事のように見える。じっさい、労働生産物の価値性格は、それらが価値量として実証されることによってはじめて固まるのである。この価値量のほうは、交換者たちの意志や予知や行為には関わりなく、絶えず変動する。交換者たち自身の社会的運動が、彼らにとっては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らは、この運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存し合う私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合を通じて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、例えばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫かれるからである、という科学的認識が経験そのものから生まれてくるまでには、十分に発展した商品生産が必要なのである。それだから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。その発見は、労働生産物の価値量の単に偶然的な規定という外観を解消させるが、しかし決してその物的な形態を解消させはしない。(p101)

(10) 人間生活の諸形態の考察、従ってまたその科学的分析は、一般に、現実の発展とは反対の道を辿るものである。それは、あとから始まるのであり、従って、発展過程の既成の諸結果から始まるのである。労働生産物に商品という極印を押す、従って、商品流通に前提されている諸形態は、人間たちが、自分たちにはむしろ既に不変なものと考えられるこの諸形態の歴史的な性格についてではなく、この諸形態の内実について説明を与えようとする前に、すでに社会的生活の自然形態の固定性をもっているのである。このようにして、価値量の規定に導いたものは商品価格の分析にほかならなかったのであり、商品の価値性格の確定に導いたものは諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかったのである。ところが、まさに商品世界のこの完成形態－貨幣形態－こそは、私的諸労働の社会的性格、従ってまた私的諸労働者の社会的諸関係を顕わに示さないで、かえってそれを物的に覆い隠すのである。もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感ぜられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的等価物としてのリンネルに－又は金銀に、としても事柄に変わりはない－関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的総労働に対する関係がまさにこの奇異な形態で現れるのである。

(11) このような形態こそはまさにブルジョワ経済学の諸範疇をなしているのである。それらの形態こそ

は、この歴史的に規定された社会的生産様式の、商品生産の、生産関係についての社会的に認められた、つまり客観的な思想形態なのである。それゆえ、商品世界のいっさいの神秘、商品生産の基礎の上で労働生産物を霧の中に包み込むいっさいの奇怪事は、我々が他の生産形態に逃げ込めば、たちまち消えてしまうのである。

(12) 経済学はロビンソン物語を愛好するから、まず彼の島に行ってみよう。生来質素な彼ではあるが、彼と手いろいろな欲求を満足させねばならないのであり、従って、道具や家具を作り、山羊を飼い馴らし、魚猟をするなど、いろいろな種類の有用労働をしなければならない。彼のお祈りとかそれに類する事は、ここでは問題にしない。というのは、それが彼の楽しみの一つであり、それを息抜きとみているからである。彼の生産的諸機能は様々であるが、彼は、それらの諸機能が同じロビンソンのいろいろな決動形態でしかなく、従って、人間労働のいろいろな仕方ではないという事を知っている。必要に迫られて、彼は、自分の時間を正確に自分のいろいろな機能の間に配分するようになる。彼の全活動において、どれがより大きい範囲を占め、より小さい範囲を占めるかは、目指す有用効果の達成のために克服しなければならない困難の大小によって定まる。経験は彼にそれを教える。そしてわがロビンソンは、時計や帳簿やインクやペンを難破船から救い出していたので、立派なイギリス人として、やがて自分自身のことを帳面につけはじめる。彼の財産目録のうちには、彼が持っている使用対象や、それらの生産に必要ないろいろな作業や、最後に、これらのいろいろな生産物の一定量が彼に平均的に費やさせる労働時間の一覧表が含まれている。ロビンソンと、彼の自製の富をなしている諸物との間の一切の関係は、ここでは全く簡単明瞭なので、たとえばM・ヴィルト氏でさえも特に心を労することなくこの関係を理解することができたことであろう。しかもなお、その内には価値のすべての本質的な規定が含まれているのである。(p103)

(13) そこで今度は、ロビンソンの明るい島から、暗いヨーロッパの中世に目を転じてみよう。ここでは、あの独立した男に代わって、誰もが従属しているのが見られる。農奴と領主、家臣と君主、俗人と聖職者。人的従属関係が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に築かれている生活の諸部面をも特徴づけている。しかし、まさに人的従属関係が、与えられた社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物も、それらの現実性とは違った幻想的な姿をとる必要はないのである。労働や生産物は夫役や貢納として社会的機構のなかに入っていく。労働の現物形態が、そして商品生産の基礎の上でのように、労働組の一般性がではなくその特殊性が、ここでは労働の直接に社会的な形態なのである。夫役は、商品を生産する労働と同じように、時間で計られるが、しかし、どの農奴も、自分が領主の為に支出するのは、自分自身の労働力の一定量であることを知っている。坊主に納めなければならない1/10税は、坊主の祝福よりもはっきりしている。それゆえ、ここで相対する人々がつけている仮面がどのように評価されようとも、彼らの労働における社会的関係は、どんな場合にも彼ら自身の人的関係として現われるのであって、物として物との、労働生産物と労働生産物との、社会的関係に変装されてはいないのである。(p104)

(14) 共同的な即ち、直接に社会化された労働を考察するためには、我々は、全ての文化民族の歴史の発端で見られるような労働の自然発生的な形態にまで遡る必要はない。もっと手近な例は、自分の必要のために、穀物や家畜や糸やリンネルや衣類などを生産する農民家族の素朴な家長制的な勤労である。これらのいろいろな物は、家族に対してその家族労働のいろいろな生産物として相対するが、しかし、それら自身が互いに商品として相対しはしない。これらの生産物を生みだすいろいろな労働、農耕や牧畜や紡績や織布や裁縫などは、その現物形態のままで社会的な諸機能である。というのは、そ

れらは、商品生産と同様にそれ自身の自然発生的な分業をもつ家族の諸機能だからである。男女の別や年齢の相違、また季節の移り変わりにつれて変わる労働の自然的諸条件は、家族の間での労働の配分や個々の家族成員の労働時間を規制する。しかし、継続時間によって計られる個人的労働力の支出は、ここでは、初めから労働そのものの社会的規定として現われる。というのは、個人的労働力がはじめからただ家族の共同的労働力の諸器官として作用するだけだからである。(p104)

(15)最後に、気分を変えるために、共同の生産手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働の全ての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。ロビンソンのすべて生産物は、ただ彼ひとりの個人的生産物だったし、従って、直接に彼のための使用対象だった。この結合体の総生産物は、1つの社会的生産物である。

この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は、結合体の成員によって生活手段として消費される。従って、それは彼等の間に分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者達の歴史的発展度とにつれて、変わってくるであろう。ただ商品生産と対比してみるために、ここでは、各生産者の手に入る生活手段の分け前は、各自の労働時間によって規定されているものと前提しよう。そうすれば、労働時間は二重の役割を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望に対するいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、それは同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役立つ。従ってまた、共同生産物中の個人的に消費される部分における生産者の個人的な分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの労働や労働生産物に対してもつ社会的な関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である。

(16) p106 商品生産者の一般的な社会的生産関係は、彼らの生産物を商品として、従って、価値として取り扱い、この物的な形態において彼らの私的労働を同等な人間労働として互いに関係させるということにあるのであるが、このような商品生産者の社会にとっては、抽象的人間に対する礼拝を含むキリスト教、ことにそのブルジョワ的発展であるプロテスタント教や理神論等としてのキリスト教がもっとも適当な宗教形態である。古代アジア的とか古代的などの生産様式では、生産物の商品への転化、従ってまた、人間の商品生産者としての定在は、1つの従属的な役割、といっても共同体がその崩壊段階に入るにつれて重要さを増してくる役割を演じている。本来の商業民族は、エピクロスの神々のように、又はポーランド社会の気孔の中のユダヤ人のように、ただ古代世界のあいだの空所に存在するだけである。あの古い社会的生産有機体は、ブルジョワ的生産有機体よりもずっと単純で透明ではあるが、しかし、それらは、他の人間との自然的な種族関係の臍帯からまだ離れていない個人的人間の未成熟か、または直接的な支配隷属関係かにもとづいている。このような生産有機体は、労働の生産力の低い発展段階によって制約されており、またそれに対応して極限された、彼らの物質的な生活生産過程のなかでの人間の諸関係、従って、彼ら同士の間での関係と自然に対する関係とによって制約されている。このような現実の被局限性は、観念的には古代の自然宗教や民族宗教に反映している。およそ、現実の世界の宗教的な反射は、実践的な日常生活の諸関係が、人間にとって相互間及び対自然のいつでも透明な合理的関係を表すようになったときに、はじめて消滅しうるのである。

社会的生活過程の、即ち、物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである。しかし、そのためには、社会の物質的基礎または一連の物質的存在条件が必要であり、この条件そのもの

がまた1つの長い苦悩に満ちた発展史の自然発生的な所産なのである。(p106)

(17)ところで、経済学は、不完全とはいえ、価値と価値量とを分析し、これらの形態のうちに隠されている内容を発見した。しかし、経済学は、なぜこの内容があの形態をとるのか、つまり、なぜ労働が価値に、そしてその継続時間による労働の計測が労働生産物の価値量に、表わされるのか、という問題は、いまだかつて提起したことさえなかったのである。

\*(本文注32 p108)

**本文注p108:** \*32 古典経済学の根本欠陥の一つは、商品の分析、そして特に、商品価値の分析によって、価値をまさに交換価値となすところの価値形態の発見に、成功しなかったことである。

アダム スミスやリカードというこの学派の最良の代表者でさえ、価値の形態を、なんの重要性もないものとして、または商品そのものの性質には外的なものとして取り扱っているのである。

その原因は、単に彼等の関心がもっぱら価値量の分析にすっかり注意を奪われてしまったという事だけではない。それは、もっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的な、しかしまた、最も一般的な形態であって、これによってこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、従ってまた、同時に歴史的に、特徴付けられているのである。

それゆえ、この生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、従って、商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも見そこなうことになるのである。それゆえ、労働時間による価値量の計測について全く一致している経済学者たちの間にも、貨幣、即ち、一般的等価物の完成した姿については、最も雑多な、矛盾した見解が見られるのである。このことは、たとえば、ありふれた貨幣の定義ではもはや間に合わない銀行業の取り扱いに際して、明瞭に現れてくる。このことから、反対に、復活した重商主義（ガニルその他）が生じたのであって、これは、価値のうちにただ社会的形態だけを、またはむしろ社会的形態の実体のない仮象だけを見るのである。ここでははっきりと言っておくが、私は、W・ペティ以来の、ブルジョア的生産関係の内的関連を探究する経済学のすべてを、俗流経済学と対立させて、古典派経済学と呼ぶのであって、俗流経済学のほうは、ただ外観上の関連のなかをさまようだけで、いわば最も粗雑な現象のもっともらしい平易化と、ブルジョワの自家需要との為に、科学的な経済学によってとつくに与えられている材料を絶えず繰り返して反芻するのであるが、その他には、自分たち自身の最良の世界についてのブルジョワ的生産当事者たちのありふれた、独りよがりの見解を、体系づけ、屁理屈づけ、永遠の真理として宣言するだけで満足しているのである。(P108～p109) (本文に戻る)

(p107)そこでは、生産過程が人間を支配していて人間はまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものだということがその額に書かれてある諸定式は、経済学のブルジョア的意識にとっては、生産的労働そのものと同じに、自明な自然必然性として認められている。それだから、社会的生産有機体の前ブルジョア的諸形態は、たとえばキリスト以前の諸宗教が教父たちによって取り扱われるように、経済学によって取り扱われるのである。(注33の唯物史観参照)

(注33の唯物史観:p109～p110)

経済学者たちは、奇妙な方法で論旨を展開する。彼らにとっては、2種類の制度が、人為的と自然的とが、存在するにすぎない。封建制度は人為的であり、ブルジョアジーの制度は自然的である。この点では、彼らは2種類の宗教を区別する神学者達と似ている。彼らの宗教でない宗教は、いずれもみな人間が発明したものであるが、彼ら自身の宗教は、神の啓示したものである。…だから、これらの関係それ自体が、時代の影響とは関わりない自然法則なのである。常に社会を規制すべき永久的な諸法則なの

である。（「哲学の貧困」全集4/原p139）

(18) 商品世界に付着している呪物崇拜、または社会的な労働規定の対象的外観によって、一部の経済学者がどんなに惑わされているか、このことをとりわけ良く示しているのは、交換価値の形成における自然の役割についての馬鹿げた争論である。交換価値は、ある物に投ぜられた労働を表す一定の社会的な仕方なのだから、例えば為替相場などと同様に、それが自然素材を含んでいることはありえないのである。

(19) 商品形態は、ブルジョワ的生産の最も一般的で最も未発展な形態であり、それゆえ、今日と同じように支配的な、従って、特徴的な仕方ではないにせよ、早くから出現するのであって、そのために、その呪物的性格は、まだ比較的容易に見抜かれるように見えるのである。

それよりももっと具体的な諸形態では、この単純性の外観さえ消えてしまう。重金主義の幻想はどこから来るのか？ 重金主義は、金銀から、それらが貨幣としては社会的生産関係を、といっても特別な社会的属性をもった自然物の形態で、表しているということを見て取らなかった。

また、重金主義を冷笑する近代経済学は、その呪物崇拜は、それが資本を取り扱う段になるとたちまち明白になるのではないか？ 地代は土地から生まれるもので、社会から生まれるものではないという重農主義の幻想が消えたのは、どれほど以前のことだろうか？

(20) だが、先を急ぐ前に、商品形態に関するもう一つの例を見てみよう。もし、商品が物が言えるとするれば、商品はいこう云うだろう。「われわれの使用価値は人間の関心を引くかもしれない。使用価値は物としての我々に備わっているものではない。だが、物としての我々に備わっているものは我々の価値である。我々自身の商品としての交わりがそのことを証明している。我々はただ交換価値として互いに関係し合うだけだ。」では、経済学者がこの商品の心をどのように伝えるかを聞いてみよう。「価値（交換価値）は、物の属性であり、富（使用価値）は、人間の属性である。価値は、この意味では、必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない。」「富（使用価値）は、人間の属性であり、価値は商品の属性である。人間や社会は富んでいる。真珠やダイヤモンドには価値がある。・・・真珠やダイヤモンドには、真珠やダイヤモンドとして価値があるのだ。」

(21) 真珠やダイヤモンドのなかに、交換価値を発見した化学者はまだ一人もいない。ところが、この化学的実体の経済学的発見者たちは、物の使用価値はその物の物的属性には関わりがないのに、その価値は、物としてのそれに備わっているということを見出すのである。ここで彼らの見解を裏付けるものは、物の使用価値は人間にとって交換なしに、つまり人と物との直接的関係において実現されるが、物の価値は、逆にただ交換においてのみ、即ち、一つの社会的過程においてのみ実現される、という奇妙な事情である。ここで、あの好人物のドッグベリーが思い出されないだろうか？ 彼は夜番のシーコールに教える－「およそ容貌の善し悪しは運命の賜だが、読み書きは、自然にして備わるものだ」と。

（注36p112）

（注36p112）S・ベリーは、リカードに、交換価値を単に相対的なものからある絶対的なものに転化させたという罪を負わせているが、逆である。リカードはこれらの物、たとえばダイヤモンドや真珠が交換価値として持っている外観的相対性を、外観の背後に隠されている真の関係に、人間労働の単なる表現としてのそれらの物の相対性に、還元したのである。もしリカード派の人々がベリーに対して大雑把に、だが適切にではなく答えたとすれば、それは、ただ、彼らがリカード自身のもとでは価値と価値形態または交換価値との内的関連についてなんの解明も見出さなかったからにすぎないのである。（p112）

【第一章 終り】

2025/06/28